鹿屋体育大学における「武道とスポーツ」の概念に関する考察

前阪茂樹*

Ⅰ．はじめに

「武道はスポーツか否か」という命題は，流派色をなくし，近代化，つまり競技色を強くしていく中で，常に論議されてきており，今日も尚その議論の決定的な答えは出ていない。

この議論について，一般論としてではなく，「体育大学における武道とスポーツ論」を私なりに展開してみたい。

武道・剣道は日本の文化であるとともに伝統的文化遺産であるといわれている。日本文化は日本人の行動様式，生活様式の総体的なものであり，元来，日本の社会の在り方や人としての生き方，ものの考え方の根幹をなすものだったはずである。

また，文化というものは元来，それぞれの国や民族固有の価値観に根ざされたものであり，相対的である。つまり文化には上下，優劣は基本的に無い。先進国も後進国も無い。東洋は東洋，西洋は西洋で良い。武道修行者であるから故か，私はこのような大切な文化が日本においてはどうもギクシャクしていると感じる。更には日本文化に対しての日本人自体の意識が低いように感じるのである。

「世界のどこにでもあるもの（スポーツ）を受け入れ，世界のどこにも無いもの（武道）をなぜ壊すのか？」

武道とスポーツの取り扱いや考え方も，その中の一事例であると思う。それらの理由はさまざまであろうが，一つには明治以降の近代の日本の構造及び文化概念が欧米の概念による押しつけによってなされてきた（受け入れてきた）からではなかろうか？西欧語を翻訳し新しい社会構造を受け入れ，目指してきたため，どうしても西欧優位の思想のもと，育ってきたからではないだろうか？ここで考えてほしいことは，武道は元々内にあったものであり，スポーツは途中で外からやってきたものであるということである。現今の日本においては，それらの概念自体が逆転しているかのような様相を呈している錯覚を覚えてしまう程である。

しかも文化の概念形成には，特に戦後教育は欧米主導型で力を注いできたために，近代以前に悠久の年月をかけて育まれてきた日本的な思考や思想・精神の根本が断ち切られそうになりつつも，時代に翻弄されながら欧米文化と融合してきたという事実もある。

しかし，文化というものはその根本においては決して融合しない（できない）ものである。そこをお互いに尊重しなければならないし，日本という国が国際社会で自国の良さ・特色を出していくにも不可欠であると思う。

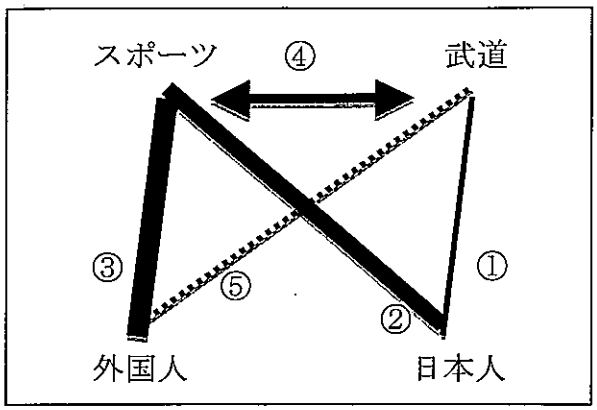
Ⅱ．武道とスポーツを理解する糸口

専門外なので詳しいことはいえないが，医学の世界での東洋医学と西洋医学の捉え方と一部類似しているかのように，武道とスポーツの関連がそれぞれ位置付けられているように思われるので，以下の図を参照しながら両者の関係を考えたい。

次頁図を見ながら説明・考察すると，

① は，武道（日本文化）と日本人の関係である。この①のラインをもっと太くすることが，国立大学唯一の体育大学であり，武道課程を持つ本学の使命なのではないか？特に21世紀はこころの時代などといわれ，昨今の教育基本

*鹿屋体育大学伝統武道・スポーツ文化系（剣道）　准教授



図．武道とスポーツのN字（持）論

法の改正，伝統と文化の尊重という文言や，それに関わる中学校における武道必修化などの流れ等をみても，強く感ずるところである。

② のラインは現在，太いものになっている。何故か？スポーツの概念は元々，「楽しさ」を追求することであり，これは自然な流れと考えることもできる。

③ は，元々スポーツという文化が西洋のものであるという所以である。

④ は，近代以降の日本において２つの文化が時代に翻弄されながら融合されてきた現象であると考えられる。つまり，スポーツの武道化，武道のスポーツ化という現象である。

(a) 野球道という言葉に代表される様に，元々楽しさを追求するものが，勝負論において，より楽しむためにより高度な技術を磨き，さらに求道的性格を帯びていったもの。

(b) 柔道や剣道などの種目で大会が増え，元来，稽古修業を通じて自己の心身を鍛えるのが第一目的であった武道が，勝利至上の考えのもと，結果第一でそのものを評価するようになった現象。（戦後の武道禁止，スポーツとしての復活に大きく関与していると思われる。）

⑤ は，武道の国際化であり，その実態・考え方として，

(a) 武道の国際スポーツとしての普及なのか？

(b) 外国人がミステリアスな日本武道の技芸，伝統文化としての運動形式に魅せられているのか？

最新且つ慎重な調査が必要であろう。

ここでの重要な課題は，②と③若しくは①と⑤の取り扱いが必ずしも同一ではないということである。ましてや本論議における①と②の関係はベクトルが違う。よって同一視は決してできないのである。

世界の文化を欧米主導のもと同一視しようという潮流を作るべきではない。文化自体は一元化・画一化出来るものではない。そのような考えの元では，世界の文化は至る所で消滅の危機にさらされるであろう。ましてや日本人自らが日本の伝統文化を無くすような方向性で考えて良いはずがない。（2008.12　本学主催の国際武道シンポジウムでも検証済み）

文化の多元性・多様性を認め，お互いのバランスのもと維持継承していくことこそ大事であると考える。

Ⅲ．おわりに

本学における武道とスポーツの概念は，その昔，柔道の嘉納師範が提唱した「精力善用・自他共栄」の精神のもと，武道とスポーツ，それぞれがお互いを尊重し共存共栄出来ることを望んでやまない。何故ならば，鹿屋体育大学は総合大学ではなく体育単科大学だからである。体育という屋根の下に武道とスポーツという２本の大黒柱がある。これが本学の独自性であり，オリジナリティーであると考える。研究論文でもオリジナリティーの高いものは高い評価が得られるのではないか。

特に剣道では，戦前までは武術・武芸から派生し，柳生新陰流が「殺人刀」から「活人剣」思想への転換に成功し，武道として発展してきたにも拘らず，戦後敗戦による禁止期間を経て止むを得ずスポーツとして再出発するしか復活の方法が無かったのである。時を経て昭和50年に武道として

原点回帰するために，剣道の理念：「剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である」を制定した。理念とは未来永劫変わることのない概念である。つまり剣道はスポーツとしての競技的性格は持ちつつも，その本質は武道であることを宣言した訳である。他の武道種目にもそれぞれの理念があり，武道は武道として発展継承せねばその価値は半減するであろう。

つまり剣道は日本人の行動様式，ものの考え方を内在させた武道であり，この価値を今後さらに研究し，我々はもっと世界にこのことを，自信を持って発信すべきである。たとえ今日の社会認識・組織構造としてスポーツの傘下に入っているのが一般的であろうとも，本学が体育の専門大学である以上は…。